

【緊急Webセミナー】AI時代を見据えたデータ改善事例 ～AI活用に乗り遅れないためのデータマネジメント～

2025年12月11日

株式会社NTTデータバリュー・エンジニア

データマネジメント事業本部

DaaS統括部 KPO推進チーム

チーム長 沖崎 太郎

自己紹介

おきざき たろう

沖崎 太郎

株式会社 NTTデータ バリュー・エンジニア
データマネジメント事業本部
DaaS統括部 KPO推進チーム チーム長

ERPパッケージベンダでは、開発～セールスの全領域を経験、従事。

CRMツールベンダでは、データ連携に特化したコンサルティング業務に従事し、
通算で100社以上のお客様のご支援（システム要件定義～導入）

その後、データにお困りのお客様の力になりたいと考え、（株）NTTデータ・バリュー・エンジニアへ入社。

業務実績

- ◆ 大手金融機関データガバナンス構築支援実施
- ◆ 建築業基幹システムリプレースに伴う顧客データ統合支援
- ◆ 大手エネルギー関連企業ETLシステムリプレース支援
- ◆ 大手金融業DWH構築支援
- ◆ 製造業データマネジメント構築支援



本日お伝えしたいポイント

本日は、

“弊社がどのようにしてAI活用に繋げるご支援を行っているか”を
事例と実践ポイントを通してお伝えさせていただきます。

データの内容や構造を整理する際に「アセスメント」作業を実施します。
「アセスメント」と言葉で書くと一言で終わってしまいますが、
ご経験の無い方では何から手を付ければいいか手探りなところから始まり
アセスメントの結果を次にどう繋げるか分からず「闇雲に時間を使ってしまうことが多い」と思います。

弊社事例を通して実践ポイントの具体的なイメージを掴んでいただき、
皆様が課題解決に向けて動き出されるきっかけとなれば幸いです。



NTTデータ バリュー・エンジニア

“データで創る一步先の未来”

概要

【設立】

2001年

出来事：TDS、USJ開園
(創業:1997年)

【代表者】

代表取締役社長 大西浩史



【所在】

東京都港区新橋5-10-5
PMO新橋Ⅱ6F
新橋から約7分

私たちを支える力

【仲間】

100名



【資本金】

100百万円



【株主構成】

株式会社 NTTデータ
アステリア 株式会社

取引実績

Point

【累計】

2,000社+

【業種・業界】

金融、製造、小売・卸
エネルギー、ゼネコン、公共など多種多様

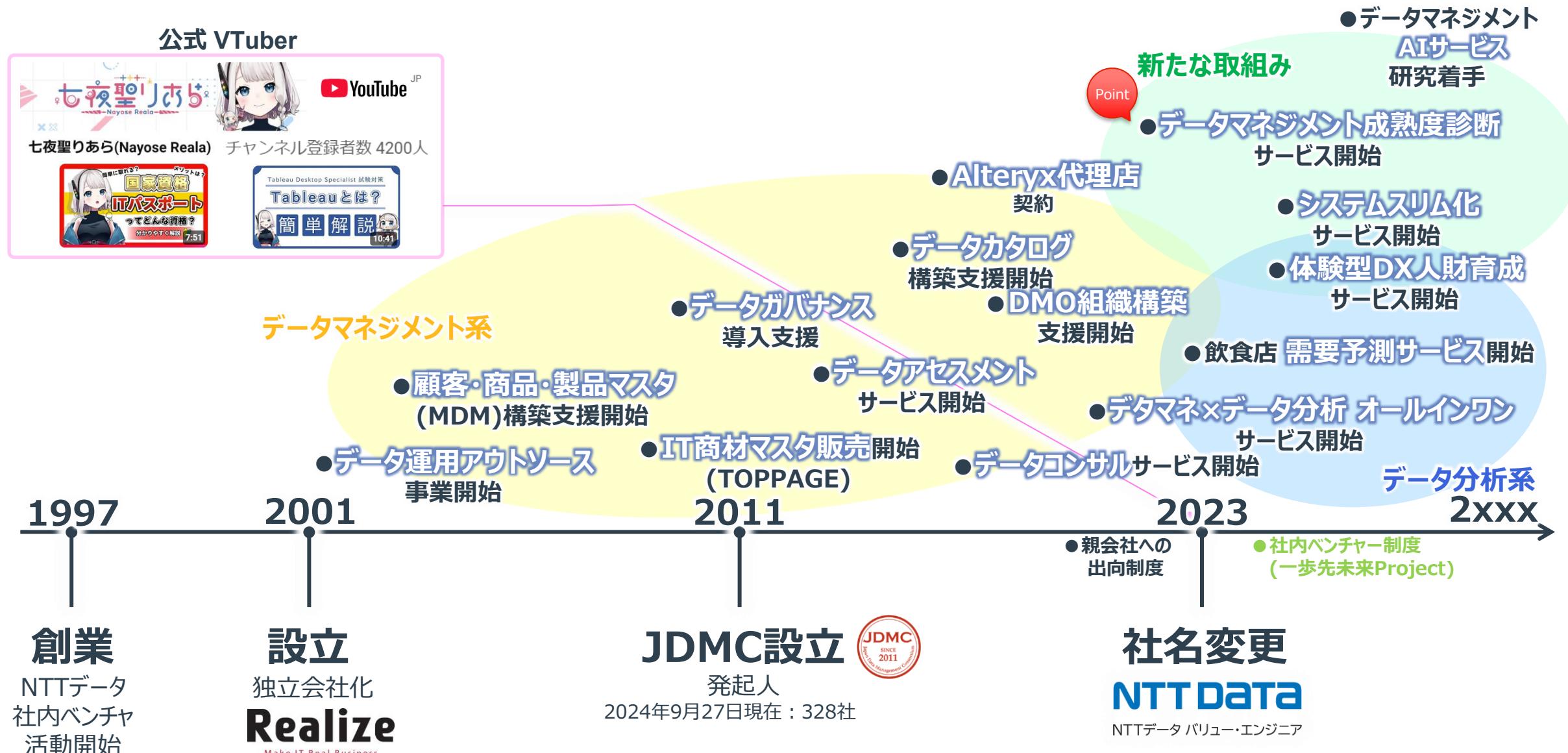
データマネ普及活動

JDMC 理事 兼 事務局長

*日本データマネジメントコンソーシアム

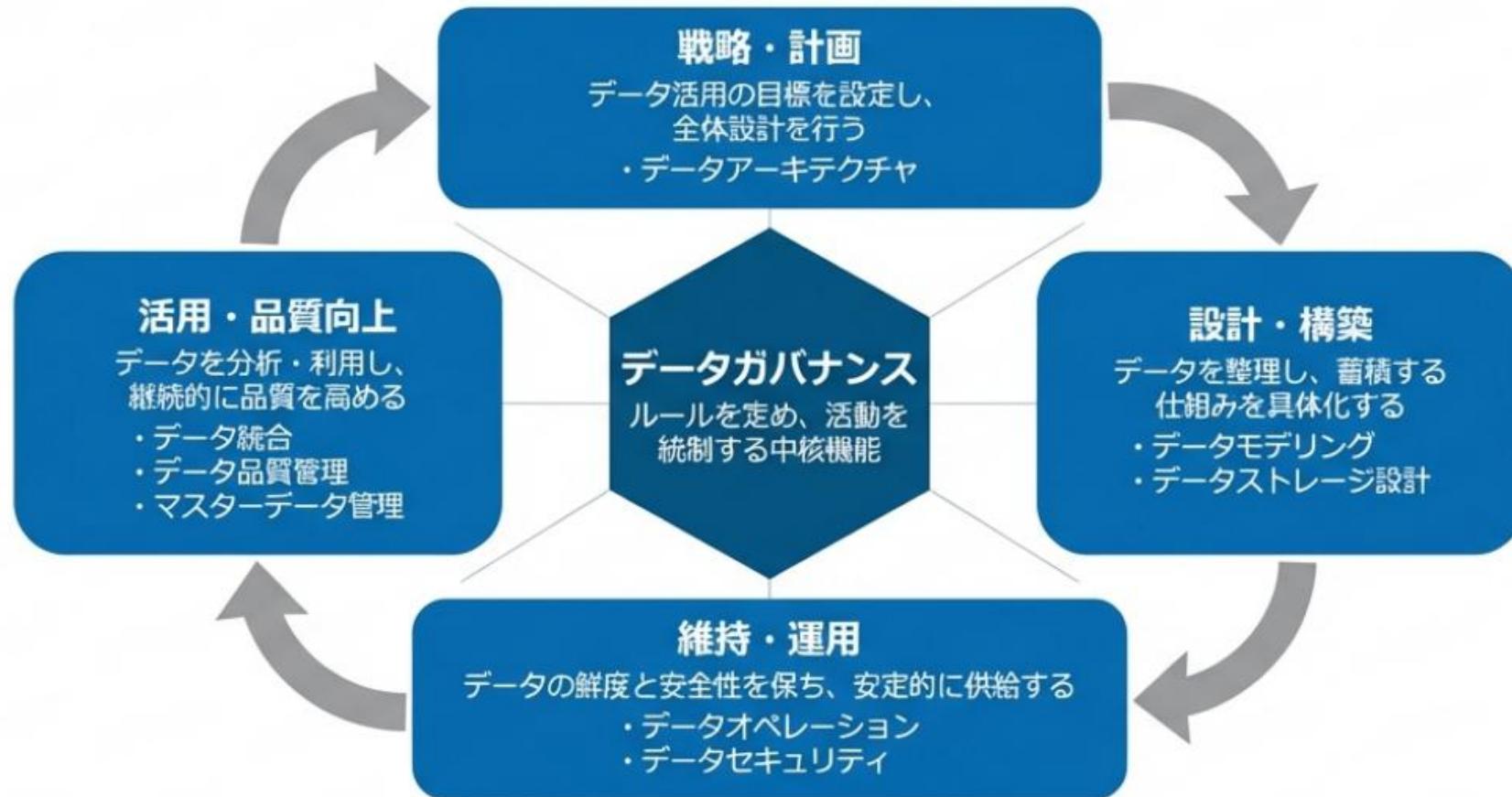
JUAS 研究部会長

沿革



データマネジメント活動の全体像

企業の「資産」であるデータを適切に管理し、ビジネス価値を最大化するための一連の活動。
正しいデータを、必要な時に、安全に活用できる状態を実現します。



データマネジメントは、データドリブンな意思決定を実現するための経営基盤です。

本日のアジェンダ

1. AI活用の現在地と「データ」という最大の壁

AI導入における課題と、その構造的な要因を解説

2. なぜ今までのデータ整備ではダメなのか？

AI時代に求められるデータマネジメントの新たな要件

3. AI活用を成功に導いたご支援事例

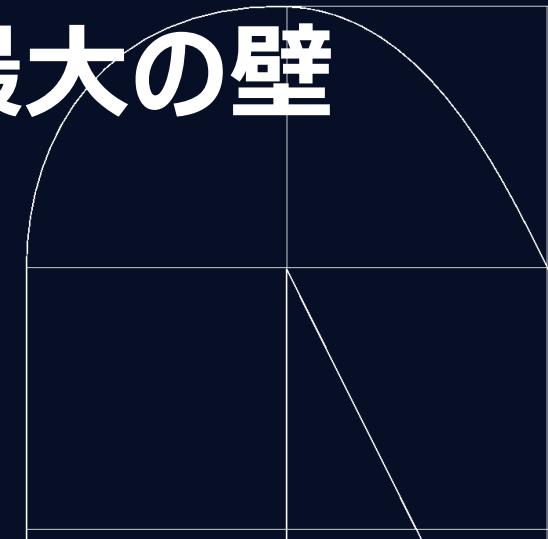
- ・事例1：AIリーダブルなDWH構築によるクエリ生成の実現
- ・事例2：限られたリソースで実現したAIチャットボット導入

4. AI時代のデータマネジメントを成功させるために

NTTデータ バリュー・エンジニアのご支援

01

AI活用の現在地と「データ」という最大の壁



AI導入における最大の課題はデータ

Thomson Reuters Institute
2025 C-Suite Survey

・世界8カ国の経営幹部(C-Suite)を対象に実施された調査では導入の最大の障壁は「データ品質」

自社のAI導入が「遅すぎる」と感じているリーダーにとって、

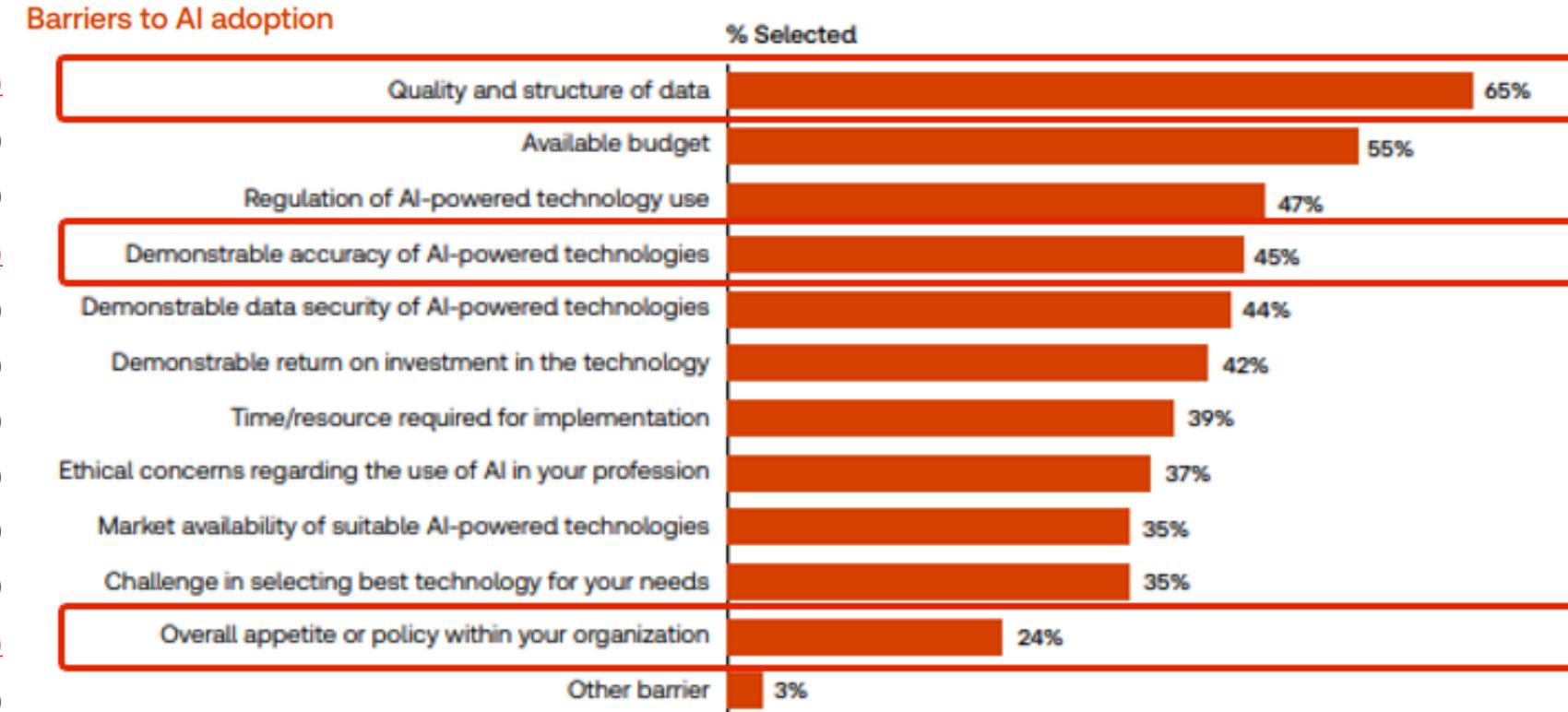
最大の障壁として挙げられたのが「データの品質と構造 (Quality and structure of data)」(65%) でした。

これは予算不足や規制への懸念を上回る最大の課題です。さらに、45%が「実証可能な精度」を課題と回答しています。

“AIに食わせるデータの整備”で“AI活用につまずいている”という事実の重さを、これらの数字は物語っています。

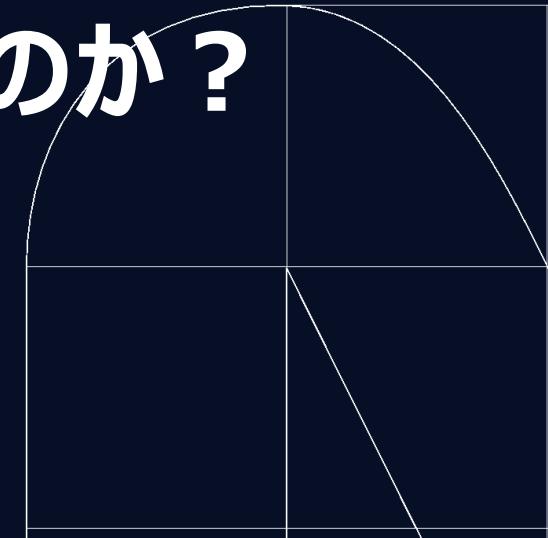
24%が課題に挙げている「組織内の意欲・ポリシー」も、データ整備を推進するためには見落とせない要素と我々は考えています。

Benefits and AI and digital transformation
may lag behind organizational realities



02

なぜ今までのデータ整備ではダメなのか？



データ活用の新たな頂点、「AI活用」

データマネジメントの優先順位を示すAikenピラミッドにおいて、従来は「データ活用」が頂点でした。しかし今、「AI活用」という、より高度なテーマが上に加わっています。



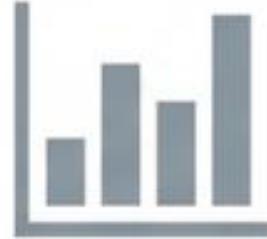
Point

"データ活用"も"AI活用"も、基礎となるデータ品質を高めていく必要があることに変わりはありません。しかし、AI活用を成功させるには、これまで以上に高度な品質が求められます。

AI時代のデータ整備で何が変わったのか？

従来のBIツールなどの「人間が見るためのデータ活用」と、生成AIなどの「AIが解釈するためのAI活用」では、データに求められるレベルが根本的に異なります。

従来のデータ整備 (BI活用など)



目的: 人間が理解・分析するため

手法: 構造化データの集計・可視化を中心

品質: 項目内の正確性、一貫性が主な関心事
(例: 売上数値の正確さ)

Point

AI時代のデータ整備 (生成AI活用など)



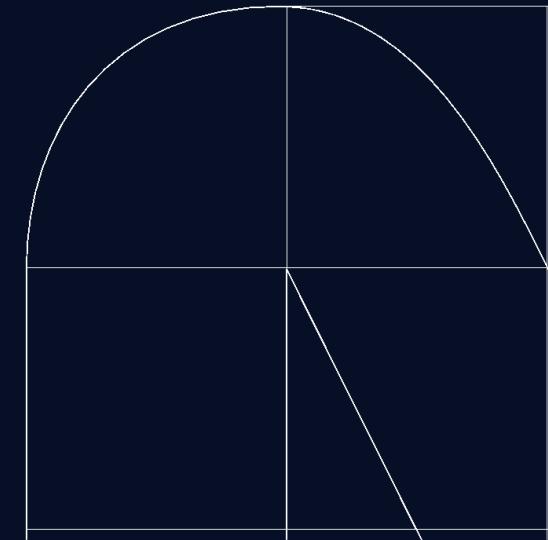
目的: AIが自律的に理解・解釈するため

手法: 非構造化データも含めた、より高度な整備が必須に
品質: 以下の3つの要件が新たに重要となる

- ① **RAGのための文脈付与 (Retrieval-Augmented Generation)**
AIが文書の意図や背景を正確に把握できるよう、意味的な関連性や文脈情報をメタデータとして付与する。
- ② **高度な構造化と正規化**
単なるテーブル化だけでなく、AIが関係性を理解できる形式への変換や、曖昧性の排除が求められる。
- ③ **AIの誤解を防ぐ高度なデータ品質**
表記ゆれや矛盾だけでなく、AIが誤った解釈をする可能性のある表現 (例: 画像内の文字、複雑な表) を排除・修正する。

03

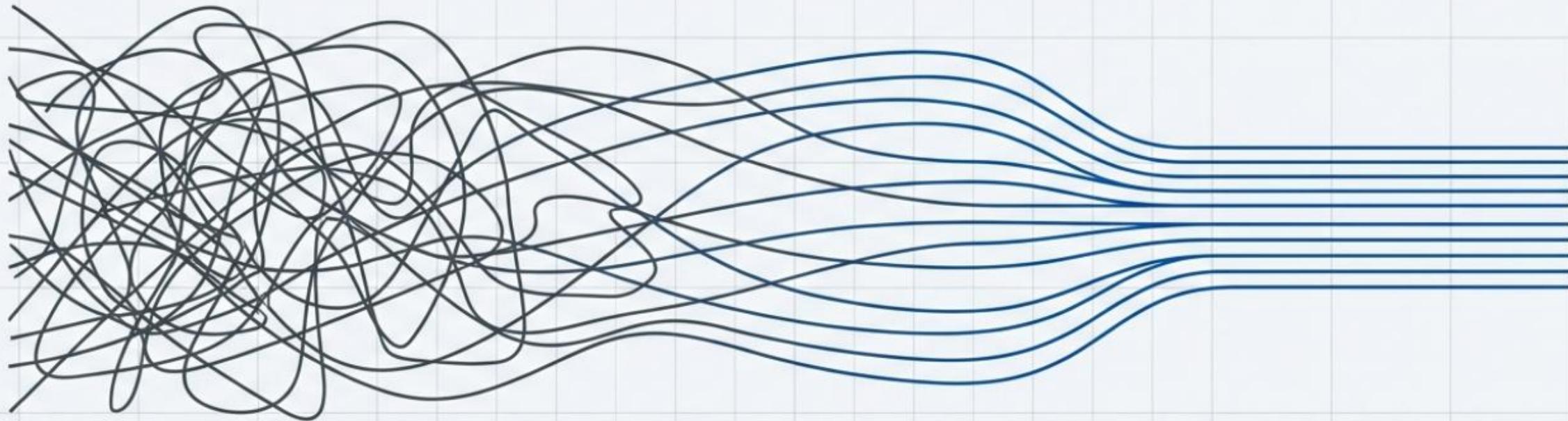
AI活用を成功に導いたご支援事例



ご支援事例その1

AI活用を成功に導く「AIリーダブル」なデータとは

煩雑なExcel管理から脱却し、データドリブンな意思決定を実現するDWH構築とデータマネジメント



AIリーダブルなDWH構築によるクエリ生成の実現



お客様の課題

- BIツールは導入済みだが、事業部ごとにExcelで管理されている重要データをDWHに格納できず、全社的なデータ活用が進まない。
- 将来的に、自然言語でのクエリ生成(Text-to-SQL)など、AIを活用したデータ利活用を実現したい。



元の状態

- データ粒度（顧客単位、案件単位など）や定義がExcelごとにバラバラ。
- 担当者の属人的な作業でデータが管理されており、品質や一貫性に課題。
- 何から手をつけるべきか分からず、DWH化プロジェクトが停滞。



支援の概要

- データアセスメントを通じて現状を可視化し、課題を特定。
- AI活用 (Text-to-SQL) を想定したテーブル設計、メタデータ定義を実施。
- データマートの設計から構築まで、一気通貫でデータ整備フローを構築。



支援後の状態

- 属的に管理されていたExcelデータが、AIが解釈可能な形式でDWHに統合された。
- データ利活用の基盤が整い、AIによるクエリ生成機能の導入に向けた具体的なステップへ進むことが可能になった。

なぜAIは「整理されていないデータ」を理解できないのか？

AI、特に自然言語でデータベースを操作するText-to-SQLのような技術は、データの「意味」を理解する必要があります。データが整理されていないと、AIは人間のように文脈を推測できず、正しく動作しません。

AIが正しく理解できないデータの例

曖昧なカラム名

✗ 「データ1」 「備考」

データ1	備考

→ AIはこれが顧客名なのか製品コードなのか判断できない。

◎ 「顧客名」 「契約製品コード」のように具体的にする。

顧客名	契約製品コード

統一されていないデータ粒度

✗ あるファイルは「顧客単位」、別のファイルは「案件単位」。



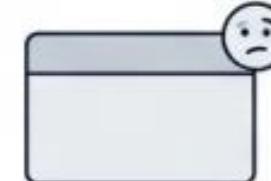
→ 「A社の売上は？」と聞かれて、AIはどうちらのデータを見ればよいか混乱する。

◎ データを正規化し、関係性をキーで明確に定義する。



不十分なメタデータ

✗ メタデータ（データの定義情報）がない。



→ AIはカラムの定義やテーブル間の関係性を理解できず、誤った結合や集計を行う。

◎ 各テーブル・カラムの意味や関係性をメタデータとして整備する。



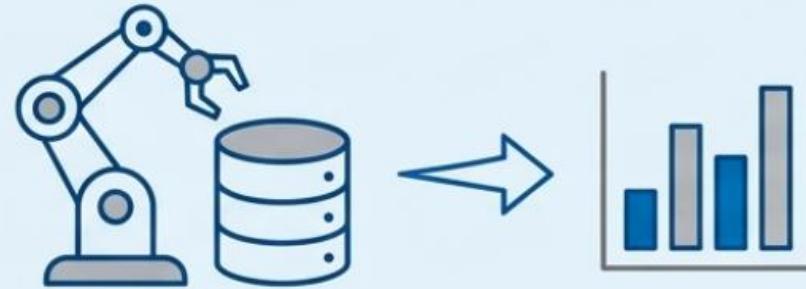
今回の支援では、AI（クエリ作成）が正しく機能するよう、これらの点を網羅した「AIにとって分かりやすい」テーブル設計とメタデータ管理を実現しました。

AIによるクエリ作成を使えるように

「AIでクエリを自動生成したい」 - その理想と、厳しい現実。

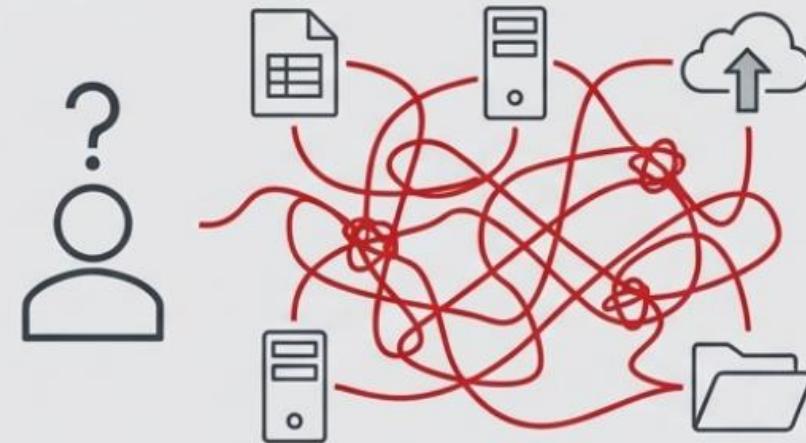
理想的なデータ利活用

- AIを活用し、誰もが簡単かつ迅速に必要なデータを引き出せる環境。



目前の課題

- そもそもAIが読み解ける形式でデータが管理されておらず、DWHに乗せることさえできない。

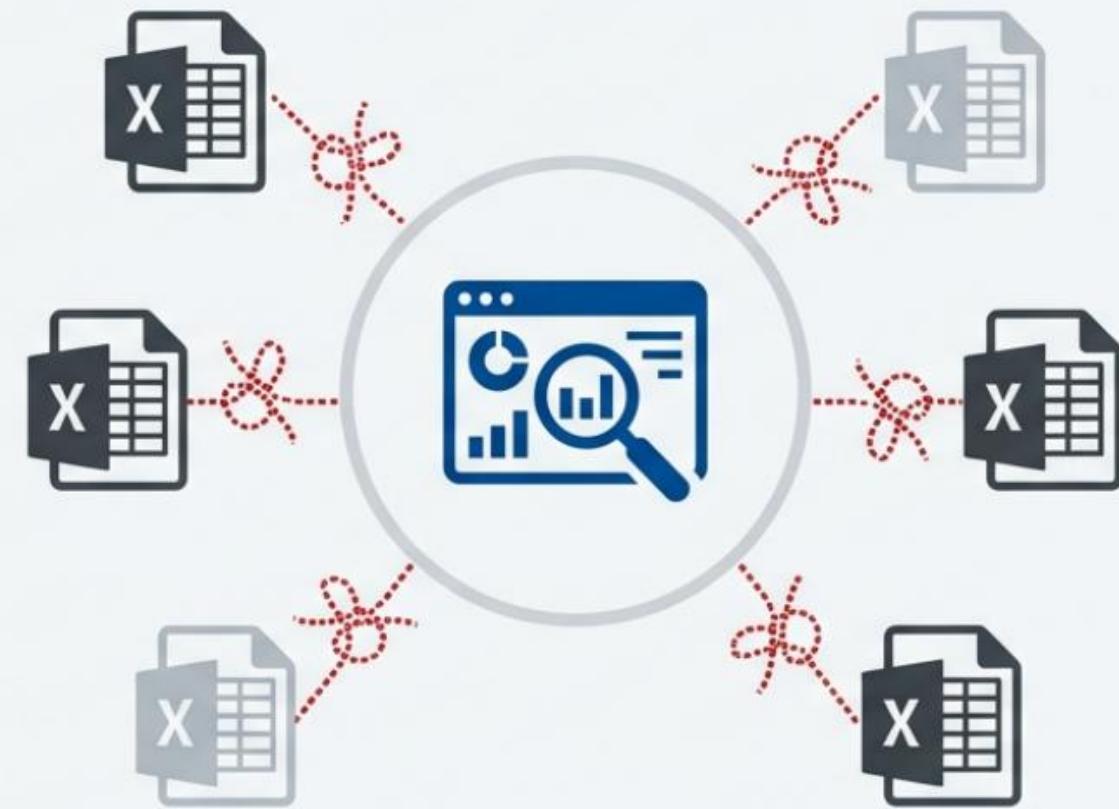


エクセルからAIリードブルなデータを作成

BIツールは導入したが、Excel依存から抜け出せない。

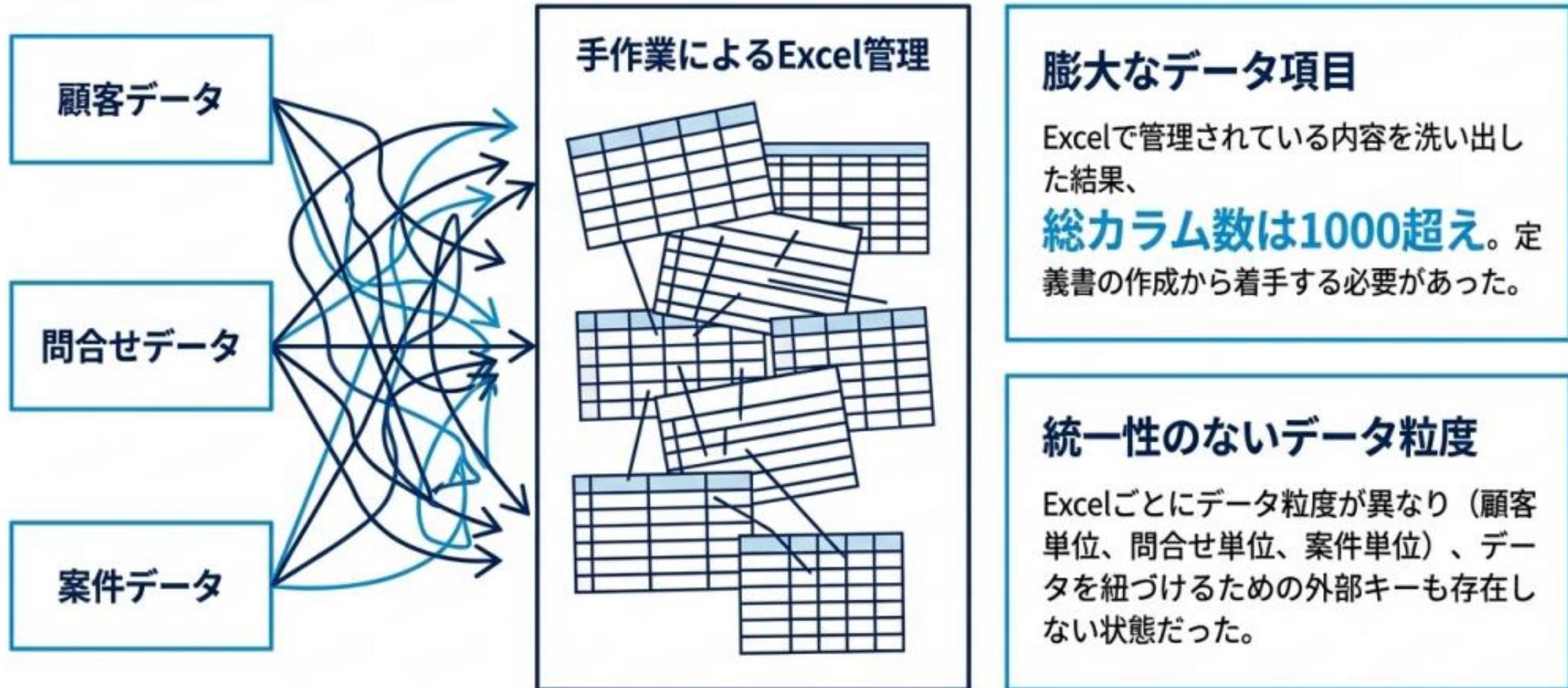
多くの企業が直面する「データはあるが、活用できない」というジレンマ。

- 事業部ごとに最適化されたExcelファイルが乱立し、全社横断でのデータ活用が進まない。
- BIツールは導入済みだが、元となるデータが整備されておらず、宝の持ち腐れになっている。
- 情報の加工や集計は、依然として手作業に依存している。



担当者だけでは解決が難しい状況

現場のデータは、想像を超える複雑性を抱えていた



ご相談の背景と現状

背景

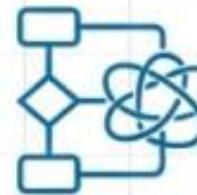
社内システムから出力した情報を、事業部ごとにExcelで手作業加工・管理。BIツールは導入済みだが、このExcelデータをDWHに乗せることができず、AI活用の検討以前の段階で停滞。

顕在化していた課題



リソース不足

「ニーズの高いデータ利活用施策が優先され、基盤整備に人手が足りない」

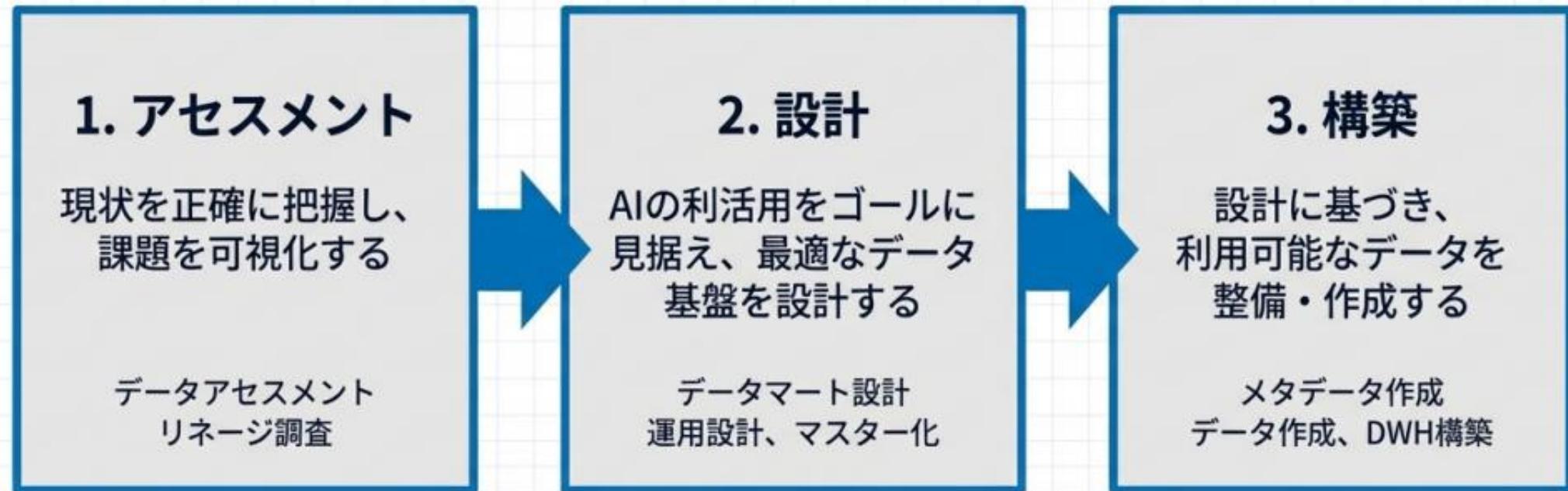


プロセスの複雑さ

「DWHにデータを乗せるためのステップが多く、何から手をつければ良いか分からず着手できずにいる」

アセスメントから一気通貫したご支援

複雑な課題に対し、NDVは体系的なアプローチで支援



ご支援の全体像

アセスメント & 設計

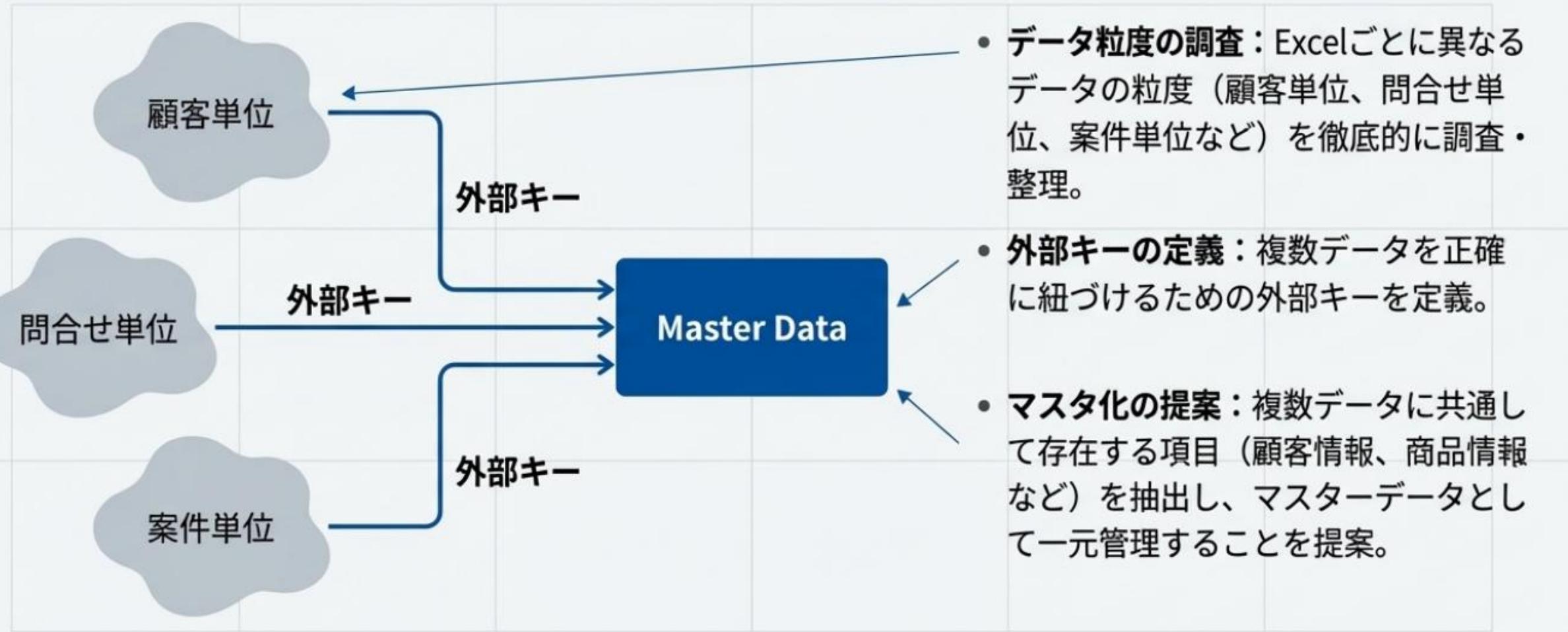
- **定義書・メタデータ作成**：Excel内容の定義書（総カラム数1000超）、およびヒアリングを通じたテーブル・カラムメタを作成。
- **データ構造の調査・整理**：データ粒度（顧客、問合せ、案件単位）の調査、複数データを紐づける外部キーの定義、共通内容のマスタ化を提案。
- **リネージ調査**：DWH仕様、ファイル間、および上位システムとのリネージを調査。

構築 & 運用

- **AI活用を想定したテーブル設計**：DWHのクエリ作成特性に合わせたテーブル設計を実施。
- **周辺業務の整備**：運用設計、外部購入データのマスター化、データマネジメントオフィス (DMO) の体制検討なども並行して実施。

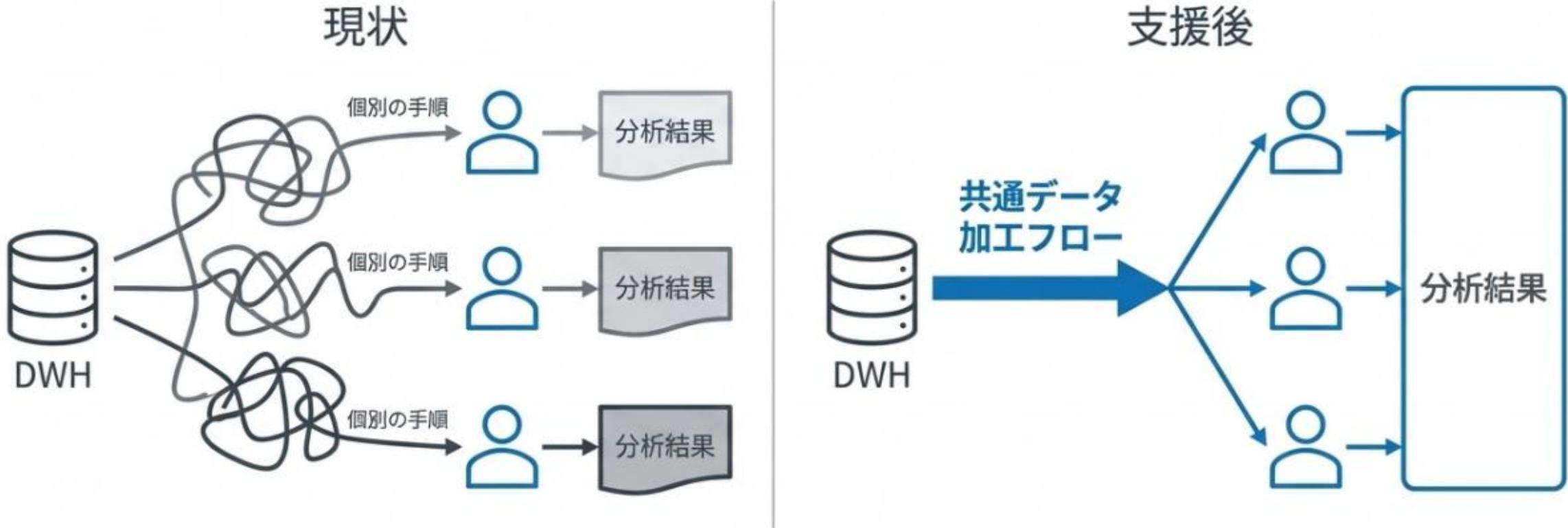
お客様とNDVで手分けしながら、これらの広範なタスクを推進。

AI活用を想定したテーブル設計



データ加工フローの定義・共通化

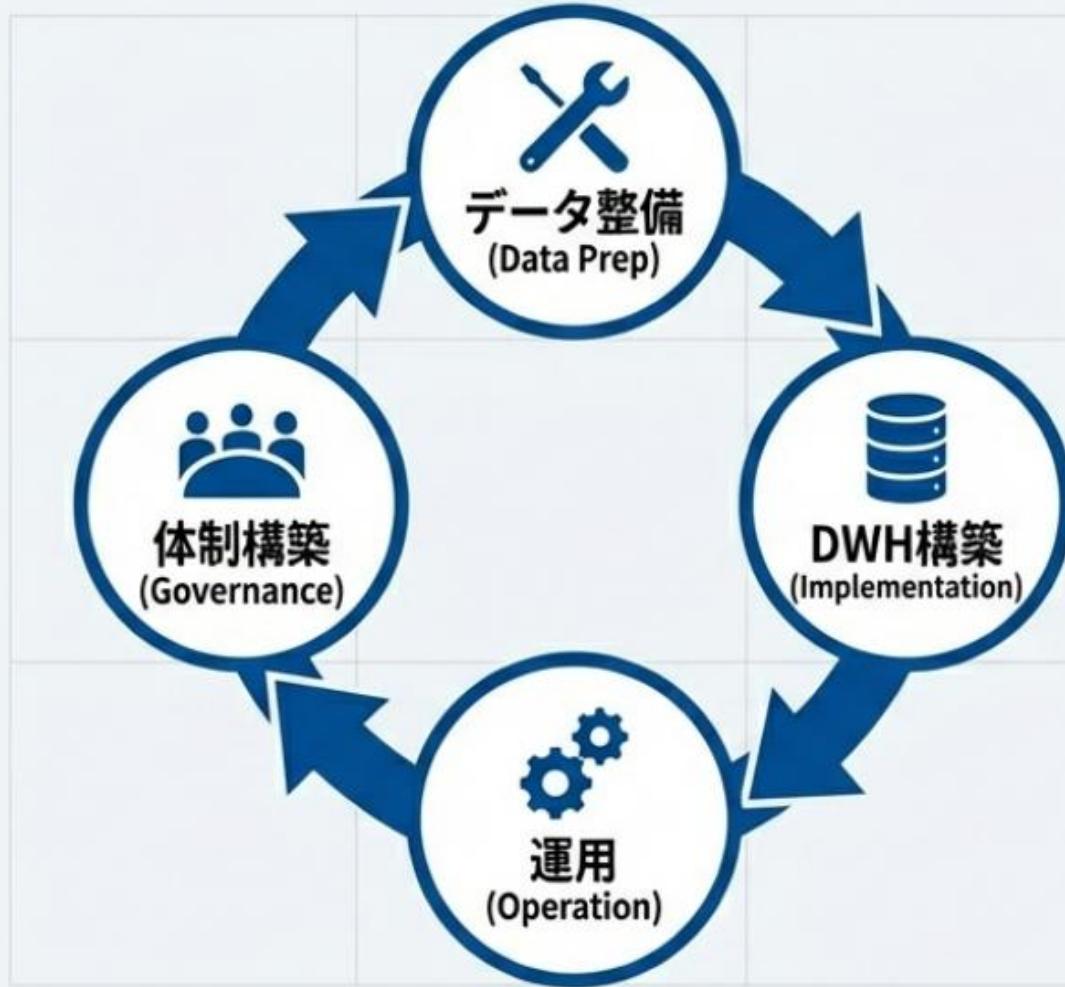
属人化からの脱却：誰もが同じ品質の結果を得られる仕組みへ



分析者ごとのノウハウに頼っていたデータ加工作業を標準化・共有化。
これにより、作業の重複をなくし、分析結果の信頼性を担保しました。

周辺業務の整備

一時的なデータクレンジングで終わらせない、包括的なデータマネジメント支援。



お客様と手分けして実施

- 運用設計：データ更新・管理のルールとフローを設計。
- 外部購入データのマスター化：外部から購入した市場データなども統合。
- データマネジメントオフィスの体制検討：データを維持管理する組織体制を検討。
- 各種リネージ調査：DWH仕様、ファイル間、上位システムとのデータ連携の追跡調査。

利活用を想定した設計と構築作業

課題の洗い出し（アセスメント）とデータ整備作業を並行して実施することで、プロジェクトを高速化。

Track 1: Assessment & Design

データアセスメント

リネージ調査

データマート設計

Track 2: Data Preparation

データ整備

マート用データ作成

運用設計



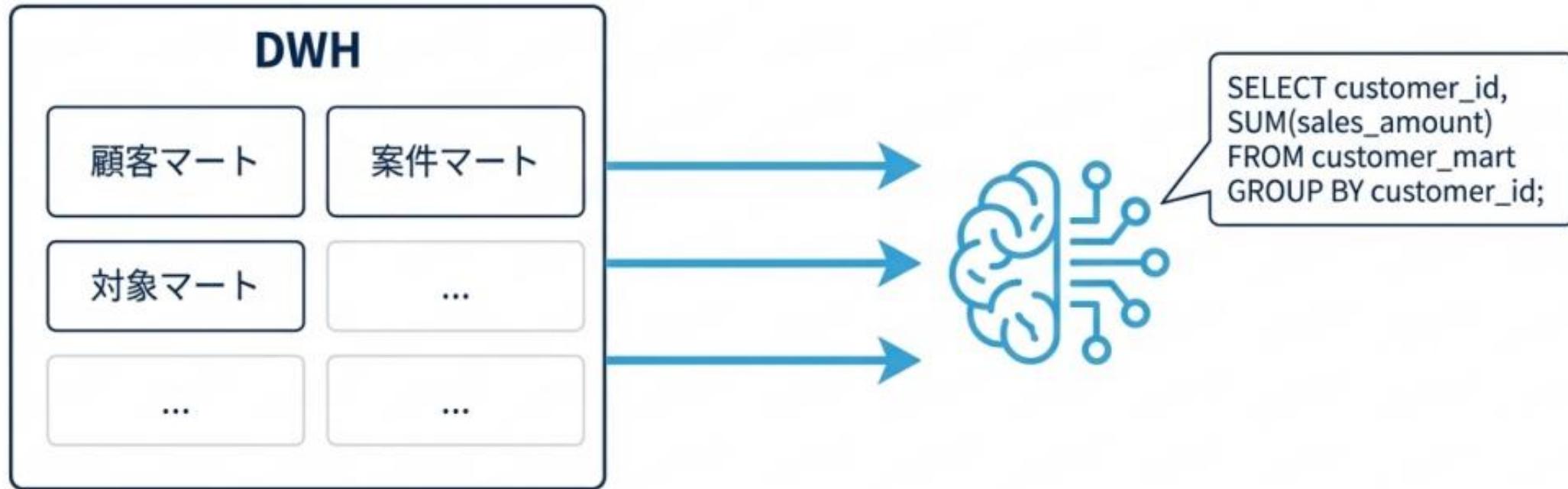
**DWH稼働
(DWH Go-Live)**

Point

- データアセスメントからリネージ調査、データマート設計、マート用データ作成まで、構築に必要な一連のフローをワンストップで支援。
- 利活用を想定したデータマート設計と運用設計を並行して実施することが、成功の鍵。

混沌とした状態から整理された状態へ

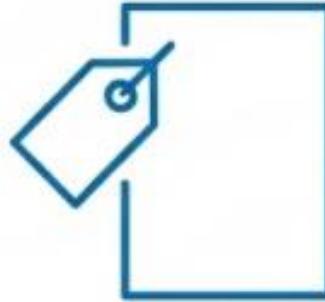
AIがクエリを自動作成できる、クリーンなデータ基盤が完成



Before: 何から手を付ければ良いか分からず、混沌とした状態。

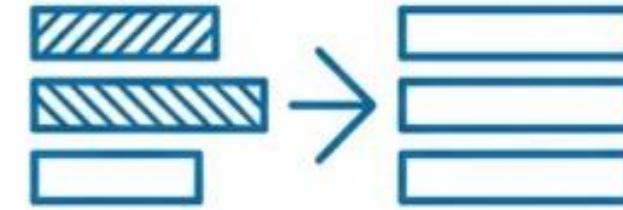
After: AI活用に向けた具体的な検討が進む、整理されたデータ基盤。

AIにとって分かりやすいデータのポイント



1. メタデータが管理されていること

AIが「このカラムが何を表すか」を理解できるよう、テーブル定義やカラム定義といったメタデータが正確に整備されている状態。人間にとての「仕様書」を、AIにも提供するイメージ。



2. カラムの名称や形式が整えられていること

命名規則に一貫性があり、データ形式(日付、数値など)が統一されている状態。これにより、AIはデータ間の関連性をより正確に推論し、適切なクエリを生成できる。

データ整備からAI活用へ

AIは魔法の杖ではない。良質な「学習データ」がなければ、その力は発揮できない。



ここまでデータアセスメントと構造化を経て、
初めてDWHのAI活用（クエリー作成）の検討が現実的なフェーズへと進む。

DWHのクエリー作成の特性に合わせた、最適なテーブル設計を実施。

AIチャットボット導入を成功に導く データマネジメント構築支援事例

某製造業様におけるロードマップ策定

限られたリソースで実現したAIチャットボット導入

お客様の課題



- * 全社的なナレッジ活用のためAIチャットボットを導入したいが、IT部門のリソースが限られている。
- * 社内マニュアルや規程が各所に散在し、量も膨大。効率的なデータ整備と、導入後の継続的な維持管理の仕組みが必要。

元の状態



- * ドキュメントの全体像が不明。重複、バージョン違い、古い情報が混在。
- * ドキュメントの形式がバラバラ（画像中心、複雑な構成など）。
- * 何から優先して整備すべきかの判断基準がない。

支援の概要



- * ドキュメントの棚卸しと台帳化を実施し、全体像を可視化。
- * チャットボットの回答精度要件から逆算し、整備対象の優先度を定義。
- * AIの読み解きを阻害する要因を特定し、機械的な処理で消するフローを構築。
- * 導入後を見据えたデータマネジメント体制とロードマップを策定。

支援後の状態



- * 限られたリソースの中で、リリース予定を守りながらAIチャットボット導入に向けた現実的な計画を構築。
- * 「データマネジメント」が個別の作業ルールから全社の共通言語となり、継続的な改善活動の土台ができた。

限られたリソースで実現するための「賢い」優先度付け

膨大なドキュメントをすべて完璧に整備するのは非現実的です。そこで、チャットボットに求められる回答のレベルから逆算し、整備の濃淡を付けることで、効率的な整備フローを構築しました。

アウトプットから逆算した整備レベルの定義

レベル高：手厚い整備

期待する回答：複数の文書から最適な回答をAIが生成
対応：詳細なメタデータを付与し、内容を構造化
対象：利用頻度が高く、内容が複雑な重要文書

レベル中：標準的な整備

期待する回答：単一文書の内容を要約して回答
対応：基本的なメタデータ付与とフォーマット統一
対象：一般的なマニュアルや規程

レベル低：最小限の整備

期待する回答：関連文書を提示（サジェスト）する
対応：タイトルとキーワードのメタデータのみ付与
対象：利用頻度が低い、または参照のみで十分な文書

Point

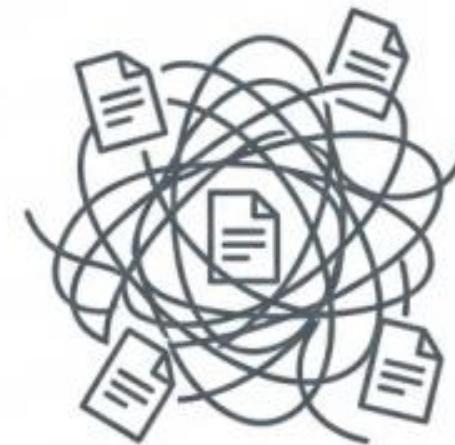
このアプローチにより、手厚く整備する対象を絞り込み、リリース予定を遅らせることなくプロジェクトを推進しました。

限られたリソースでAIチャットボットの導入を目指す



理想：全社的なAIチャットボット導入による業務効率化

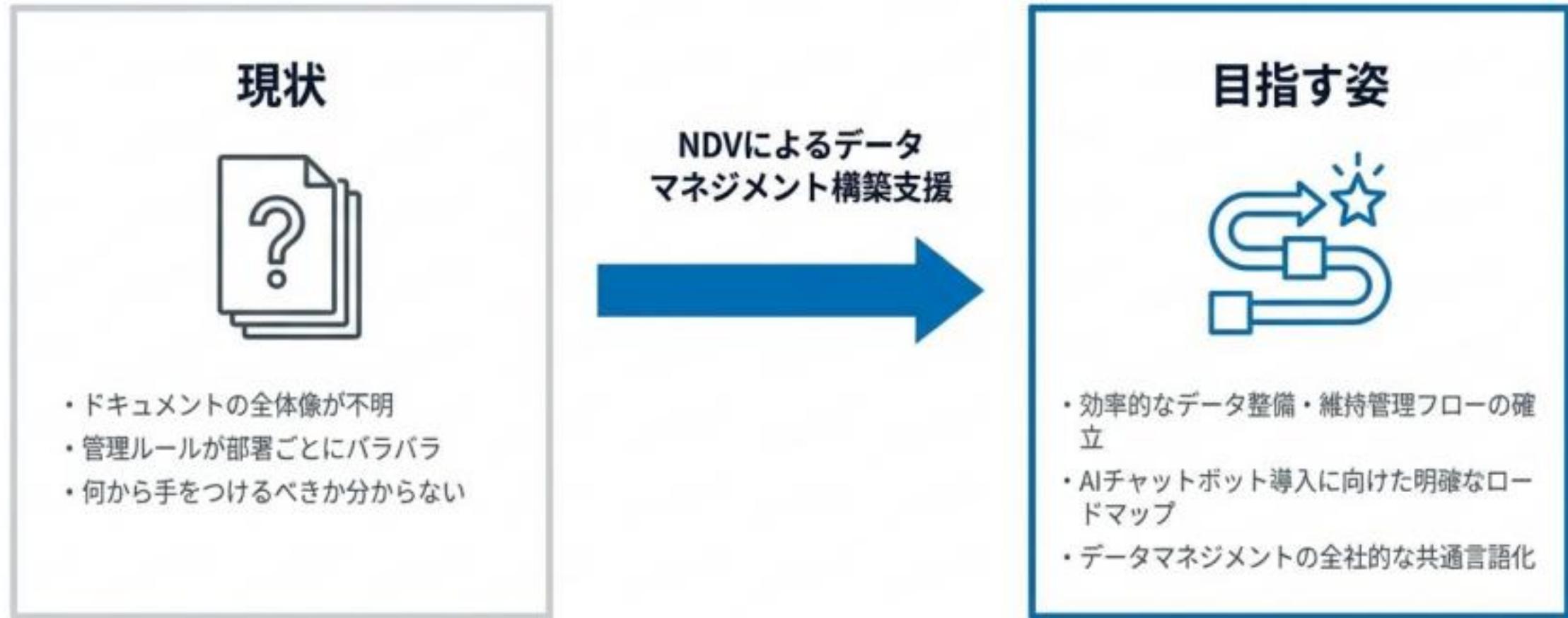
- ・全社導入を前提としたAIチャットボット活用プロジェクトが発足。
- ・将来的な維持管理まで見据え、一過性の対応ではない仕組みの構築を目指す。



現実：限られたリソースと、不明瞭なデータ実態

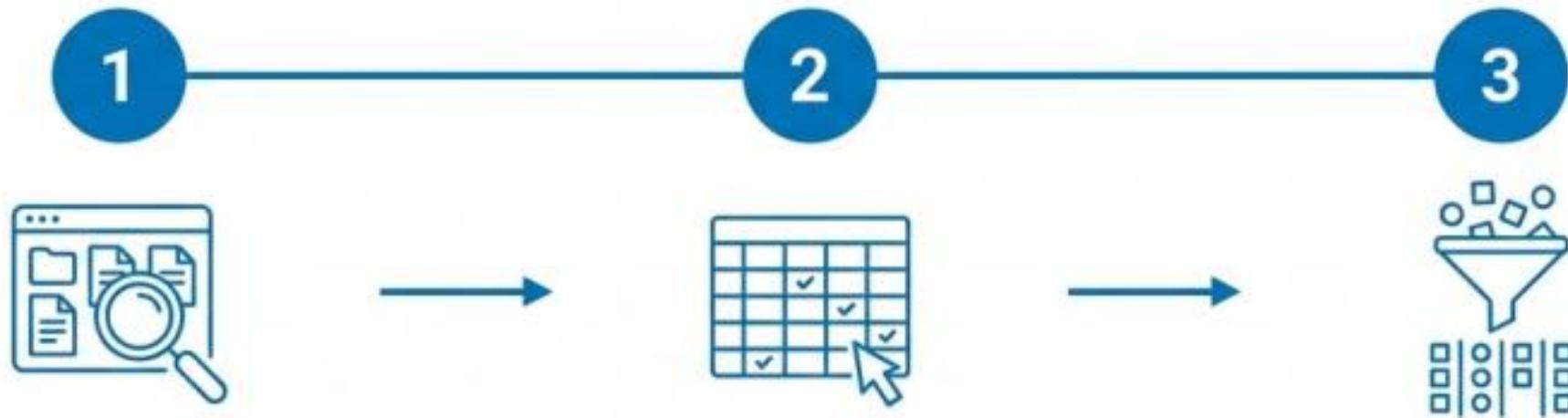
- ・IT管理部門は多岐にわたるシステム対応を担っており、本プロジェクトに割けるリソースが限られている。
- ・参照すべきマニュアルや規約は複数部署が管理しており、その全体像（量・質・重複）が全く把握できていない。

目指す先はデータマネジメントが構築された状態



正確な現状把握

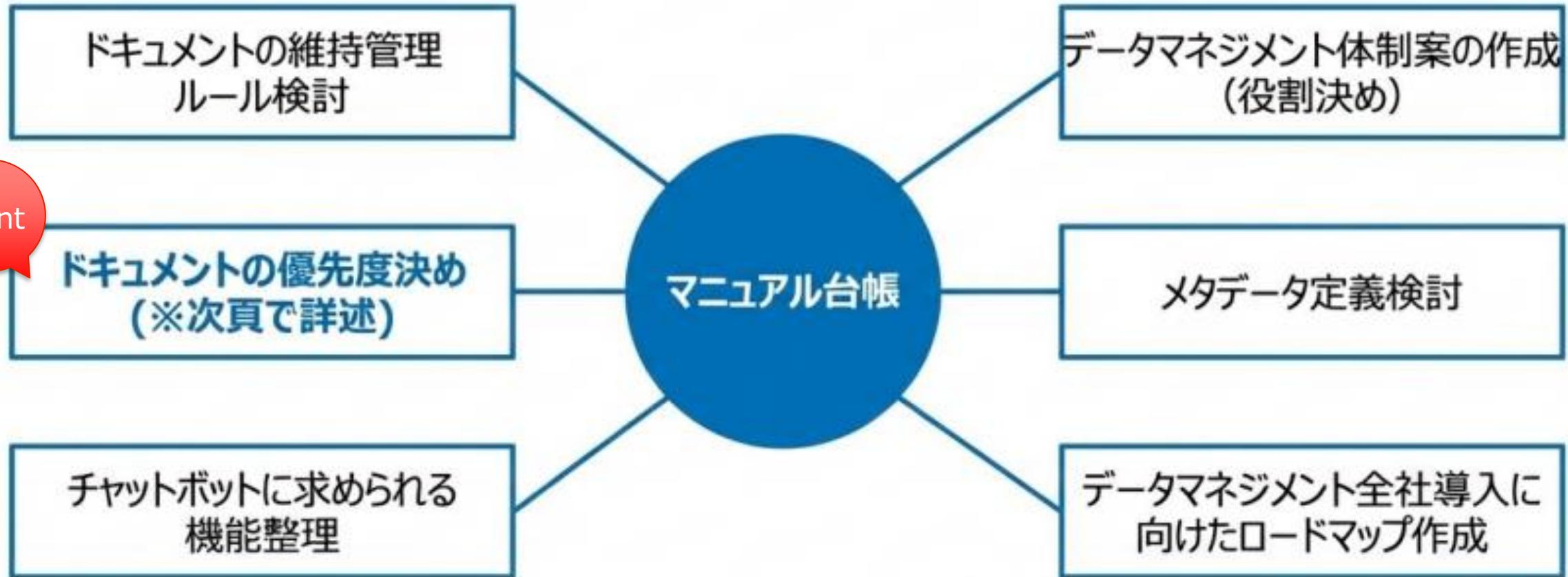
散在するドキュメントを整理し、課題を明確化



この「可視化」のステップが、後の戦略的な優先度付けの絶対的な土台となった。

実行計画（作戦）の検討

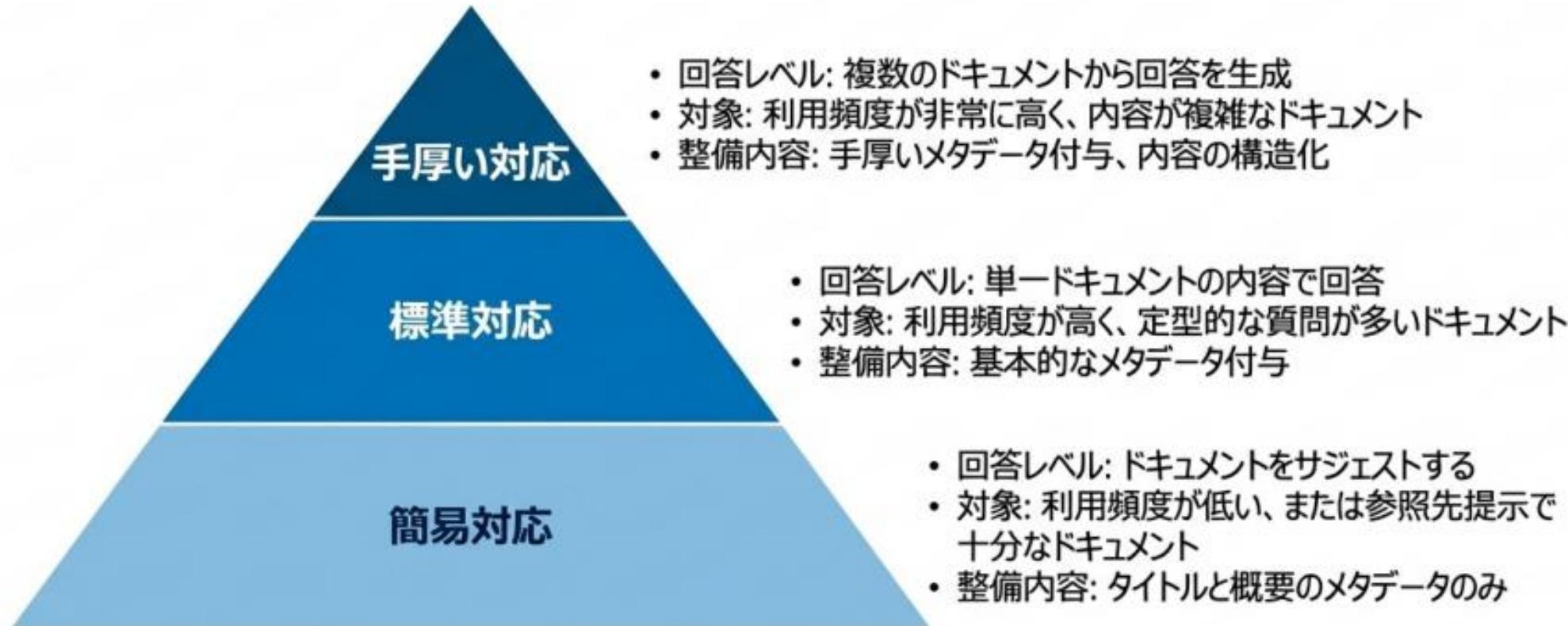
可視化された情報を基に、実現可能な実行計画を策定



限られたリソースで実現するための戦略

最重要ポイント：アウトプットから逆算した「ドキュメントの優先度付け」

全てのドキュメントに同じ労力をかけるのは非現実的。「どこまでをチャットボットに回答させるのか？」から逆算し、整備範囲に濃淡を付ける方針を決定。



優先度付けがもたらす効果



課題

- ・ 膨大なドキュメント量
- ・ 限られた時間と人員
- ・ プロジェクト遅延のリスク



アプローチ

- ・ 整備範囲に戦略的に濃淡をつける
- ・ 手厚く対応する対象を絞り込む



効果

- ・ 効率的な整備フローを構築
- ・ リリース予定を遵守
- ・ 費用対効果の最大化

回答精度の向上に向けた現実的なアプローチ

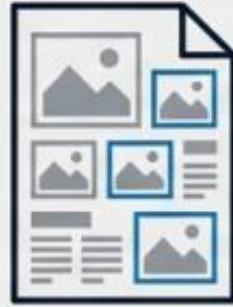
Context: リリース優先のため、既存ドキュメントの全面改訂は不可能。

Strategy: 不足箇所に絞った、最小限の改訂で精度を最大化する。

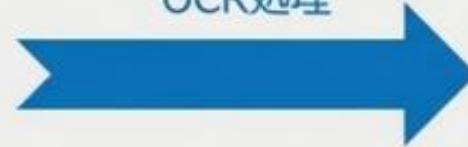


AIの読み解力を阻害する要因を機械的な処理で解消

Problem 1: 画像が多用されているマニュアル



OCR処理

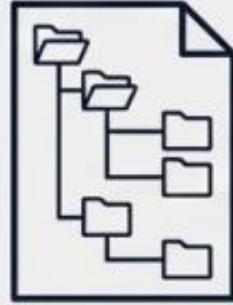


Solution



Solution: OCR処理でテキストを抽出し、AIが読める形式に変換。

Problem 2: 複雑な構成のマニュアル



Markdown処理



Solution



Solution: Markdown処理で構造を平易化し、AIが意味の単位を理解しやすくなる。

Key Principle: 手動ではなく機械的に行うことで、大量のドキュメントを効率的に処理するフローを提案。

中長期的なデータマネジメント活動の定着化



マニュアル整備ルールの構築

「AIにとって分かりやすいデータ」
を作成・維持するための
全社共通ルールを策定。

利用状況のモニタリングフロー

チャットボットの利用ログを分析し、
継続的に回答精度やドキュメント
を改善する仕組みを定義。

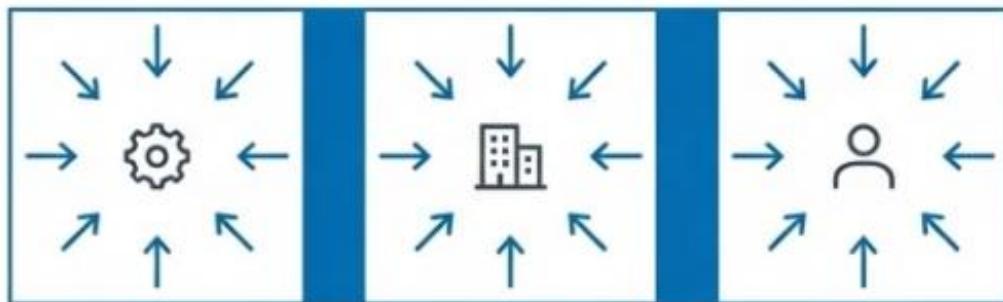
Point

他部署への展開準備

今回の成功モデルを他部門へ
展開するための標準プロセスと
推進計画を作成。

データ整備を全社の経営課題に

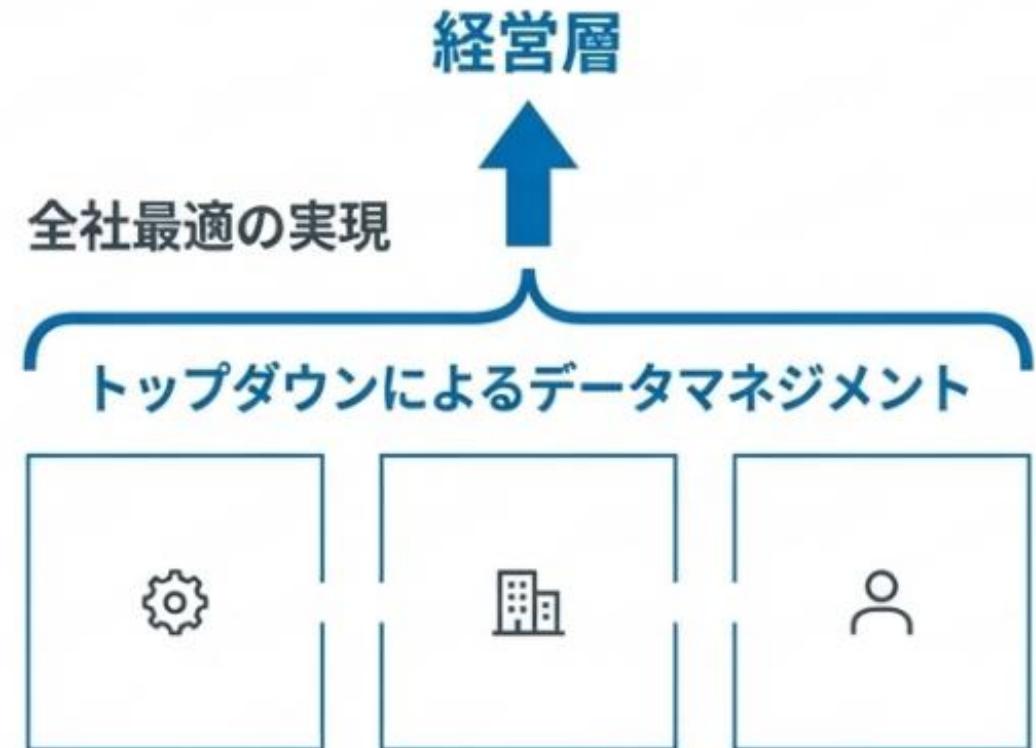
部門最適の限界



部署間の問題



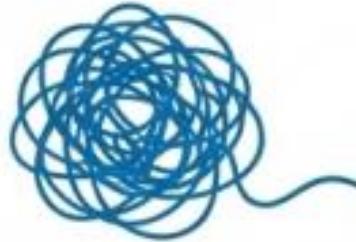
全社最適の実現



全社の経営課題

部署間の問題を解決するだけでは、根本的な解決には至りません。データマネジメントを全社的な経営課題として位置づけ、トップダウンで推進する体制を提言しました。

全社展開に向けた型作り



- 限られたリソースと、全体像が不明なデータ。
- 何から着手すべきか分からずの状態。

Our Support & Outcome:

- ✓ **現状の可視化と戦略的優先度付け**により、限られたリソースで実現可能な道筋を提示。
- ✓ チャットボット導入から維持管理までを見据えたロードマップを短期間で構築。
- ✓ 個別の作業ルールであった「データマネジメント」を、お客様との**活発な議論を通じて全社の共通言語へと昇華**させることに貢献。

Point

お客様自身がデータマネジメントの重要性を深く理解し、主体的にプロジェクトを推進する体制が整った。

AIチャットボット導入のための 2 つのポイント

1

まず「最適なアウトプット」を定義する。

AIに何をどこまで回答させるか、そのレベルを最初に決めることで、ドキュメント毎の最適なメタデータ付与や整備範囲が明確になる。



2

「AIが誤読しない」ドキュメントを作成する。

人間には自明でも、AIには解釈が難しい表現や複雑な構成は多い。シンプルな構造と明確な記述が、最終的な回答精度を左右する。



2つの事例を通してお伝えしたい3つのポイント

Point 1. AI活用の推進に必要な「2つのエンジン」

事例から分かるように、AI活用を成功させるには、単にツールを導入するだけでは不十分です。AIが能力を発揮し続けるためには、両輪となる2つのエンジンが必要です。

エンジン1: AIリーダブルなデータの整備

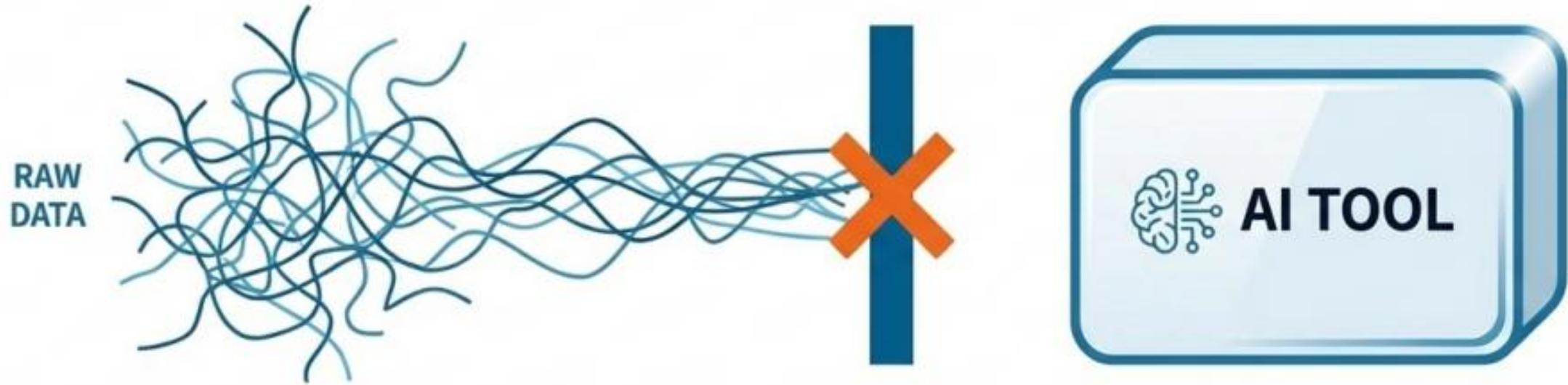
- AIが理解できる形にデータを加工・構造化する技術的な取り組み。
- メタデータを付与し、データの意味や文脈をAIに教える。
- 今回の事例でご紹介した具体的なデータ整備作業。
- 「守りのデータマネジメント」



エンジン2: データを維持・管理する仕組み

- 整備したデータの品質を永続的に維持するための組織的な活動。
- 運用ルール、推進体制、役割分担の定義。
- データマネジメントを組織文化として定着させる。
- 「攻めのデータマネジメント」

Point 2.多くの企業が陥るツールへの過度な期待



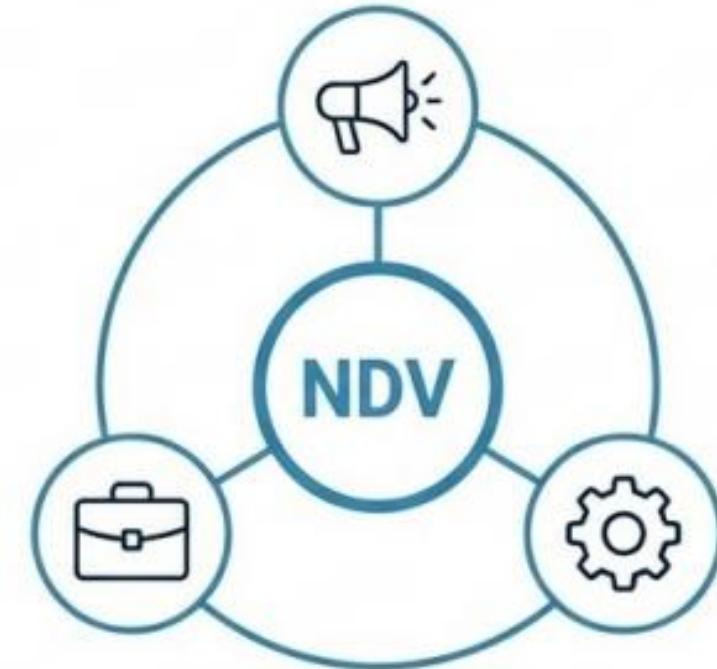
「業務改善を考える時、何かとツールに目が行きがちになります。
ただ、データは加工できるかたちで管理しないと、データとして役に立ちません。」

Point

NDV's Philosophy

「継続的な取り組みをするためには、データマネジメントの手法を用いて、
データをまとめるためのプロセスを設計する（見直す）ことが必要不可です。」

Point 3. なぜ第三者の視点が必要なのか



「部門をまたいで横通して取り組むことは
非常に難しい。」

各部門の利害や視点の違いが、全体最適のデータ整備を阻害する。

Point

業務とシステムとデータを横断的にアセスメント
NDVが第三者として客観的にアセスメントすることで、取り組むべき真のポイントが明確になります。その内容を元に他部門に説明することで、組織全体の理解と協力を得やすくなります。

04

AI時代のデータマネジメントを成功させるために
～NTTデータ バリュー・エンジニアのご支援～



データマネジメントを「企画倒れ」させないための実践ポイント

データマネジメントは、組織に根付かせることで初めて効果を発揮します。

私たちの経験から導き出された、持続的な活動にするための重要なポイントをご紹介します。

01



Point 1: 仲間作りとタイミング

部門を超えた推進チームを作り、データ基盤導入やシステム刷新といった経営の関心事とセットで企画することで、組織的な協力を得やすくなります。

02



Point 2: 根拠に基づく打ち手

まずはデータアセスメントで現状を正確に把握・評価すること。客観的なデータが、必要な施策の説得力を高め、確からしい計画の土台となります。

03



Point 3:

永続的な仕組みの設計

初期のデータ整備だけでなく、その後の品質を維持・管理するための運用ルールや体制を、計画当初から組み込むことが不可欠です。

04



Point 4:

組織的な営みへの昇華

活動ガイドラインの策定、役割と責任の明確化、そしてデータ活用教育を通じて、データマネジメントを特定部門のタスクから「組織の文化」へと変えていきます。

構想から運用まで、一気通貫で支援する基本ステップ[®]

私たちは、長年の経験を基にした独自のフレームワークにより、企画から構築、運用まで一貫してサポートし、お客様のデータマネジメント活動を成功に導きます。

Step 1: 構想策定フェーズ

現状のデータを調査・可視化し、ビジネス課題に即したデータ品質向上の期待効果と、実行すべき施策を明らかにします。

- 目的とスコープの明確化
- データ品質ギャップと原因の特定
- 施策立案

Step 2: 構築・実装フェーズ

AI活用を見据え、データ品質を恒久的に確保するためのデータ整備環境の設計と構築を行います。

- データ整備仕様設計
- データクレンジング／名寄せ
- データ整備環境構築

Point

Step 3: 運用・定着化フェーズ

構築した仕組みの形骸化を防ぐため、データ運用の代行や効果測定、改善活動の定着化までを支援します。

- 運用実行／定着化支援
- データ品質測定（効果検証）
- 改善アクションの提言

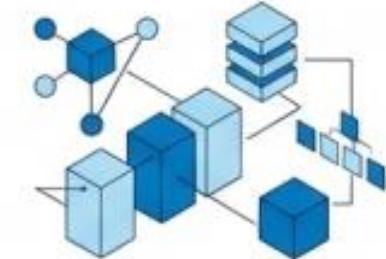
NTTデータ バリュー・エンジニアのソリューション 1/2

お客様の課題とフェーズに合わせて、多岐にわたるソリューションをご提供します。

Solution 1: データマネジメント

データの価値を最大化するための基盤を整えます。

- ・ データ診断・構想立案支援：データ品質・構造・運用プロセスを診断し、るべき姿を描きます。
- ・ データ整備支援：顧客・商品データ等のクレンジング、名寄せ、定期整備を支援します。
- ・ データ統合支援：MDMツール導入やシステム構築に伴うデータ統合を支援します。
- ・ データ移行支援：システム刷新に伴うデータ移行を、設計から本番移行までサポートします。



Solution 2: データガバナンス

データを組織の資産として管理し、統制するための仕組みを構築します。

- ・ データガバナンス適用支援：データ基盤を永続的に活用するためのガバナンス適用を支援します。
- ・ 組織横断展開支援：事業部ごとのデータガバナンスを全社に適用するための規程・体制整備を支援します。



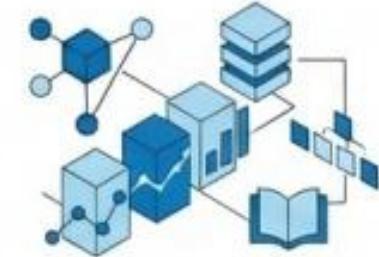
NTTデータ バリュー・エンジニアのソリューション 1/2

データの活用と、それを支える戦略策定までを幅広くご支援します。

Solution 3: データ活用

整備されたデータをビジネス価値に転換します。

- ・ データアナリティクス支援：分析用データの加工から可視化、データ分析までを支援します。
- ・ データカタログ支援：「使える」データカタログの設計、構築、運用、定着化を支援します。
- ・ オリジナル研修・教育支援：データ分析人材やデータマネジメント人材の育成を支援します。



Solution 4: データ戦略

データマネジメント活動を組織に着実に定着させ、経営に貢献する戦略を策定します。

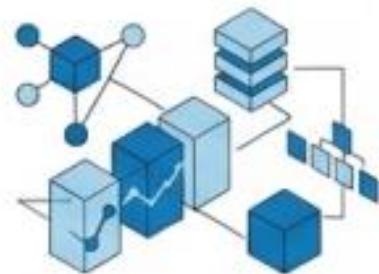
- ・ データマネジメントアドバイザリー支援：データマネジメントの価値・必要性をご理解いただくための初期支援です。
- ・ データマネジメント戦略検討支援：組織への定着化に向けた協力体制の構築や運用ルール策定を支援します。



なぜNTTデータ バリュー・エンジニアなのか

私たちの強みは、豊富な実践知と体系化された手法の融合にあります。

1



実践に基づく、
現場主義の支援
机上だけで語らない

データマネジメントの導入から定着まで、実践経験豊富なメンバーが現場の課題に寄り添い、現実的な解決策を導き出します。

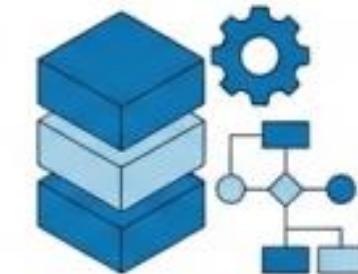
2



データ活用のゴールを
見据えた最適設計
ツール導入が目的ではない

その先のデータ活用を常に見据え、
お客様の組織風土や実情に合わせた
最適なデータマネジメントの形を共
に設計します。

3



体系化されたアセット
による効率的な導入

DMBOKベースの独自メソッド

専門会社としての長年の知見を体系化した独自のアセットやテンプレートを活用し、高品質なデータマネジメントを効率的に導入します。

【参考】NTTデータ バリュー・エンジニア掲載記事

主なWeb掲載記事

1 | 日経クロステック

デジタル化の「二周目問題」 システム部門はどうすべきか

<https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/mag/nc/18/020900021/120800127/>

2 | IT Leaders

データカタログの構築と運用で「現場の集中力」と「組織の競争力」を実現！

<https://it.impress.co.jp/articles/-/26111>

3 | ITmedia ビジネスオンライン

データの価値を高めビジネスに活かす！データマネジメントの先駆者「NTTデータバリュー・エンジニア」が描く未来

<https://www.itmedia.co.jp/business/articles/2301/16/news001.html>

4 | EnterpriseZine

はじまりはNTTデータの「購買担当」から——大西社長が歩んだ「データマネジメント・ジャーニー」

<https://enterprisezine.jp/article/detail/17692>

Point

書籍紹介

書籍 | インプレス総合研究所

データマネジメントの実態と最新動向 2025

発売日 2024/12/25

ページ数 184

著者 海老原吉晶、真野正、
越塚登
出版社 株式会社インプレス

データマネジメントの
実態と最新動向 2025

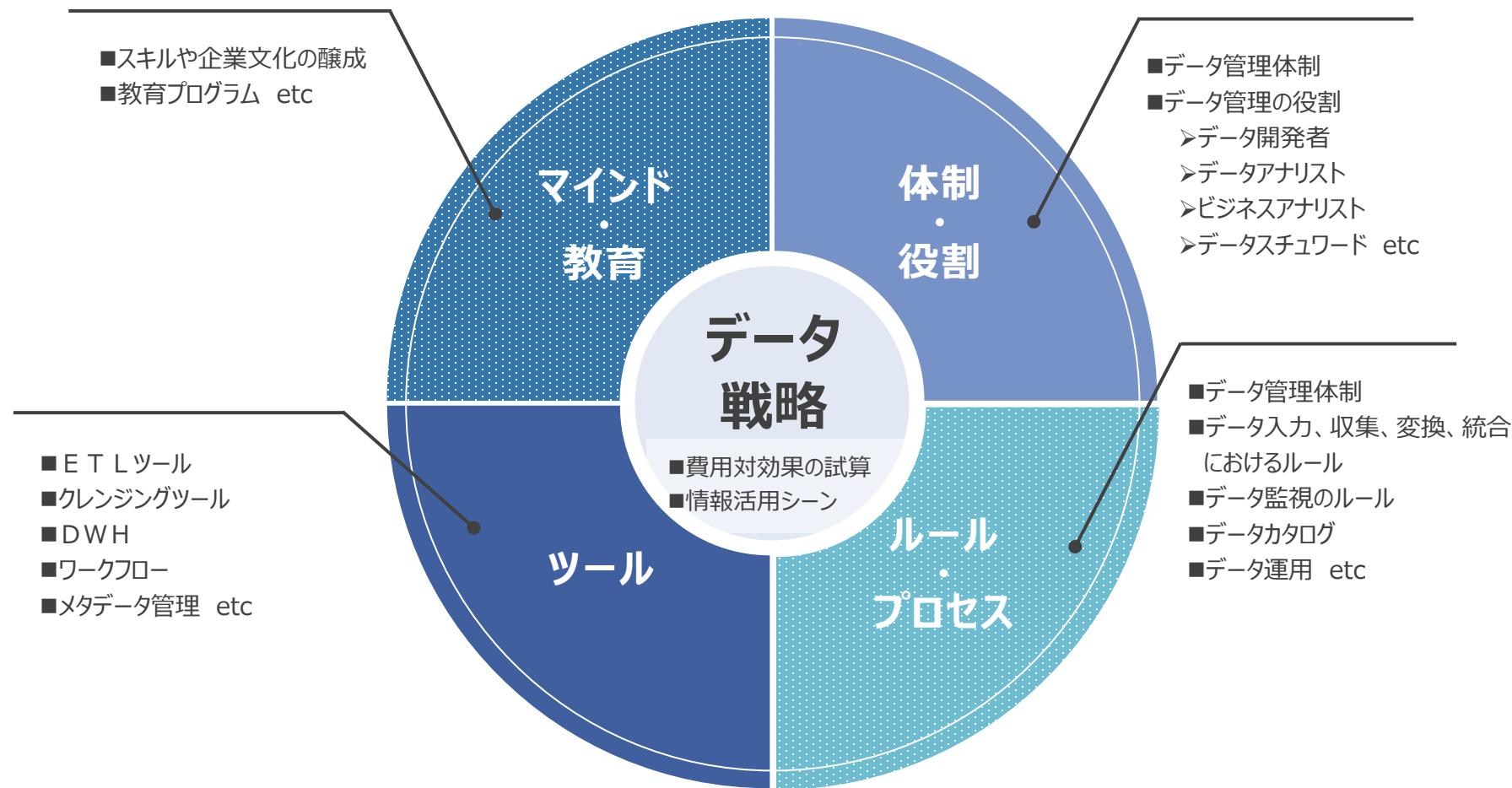
Data Management Research Report 2025

真野正／海老原吉晶／越塚登／インプレス総合研究所 (著)

真野正／海老原吉晶／越塚登／インプレス総合研究所 (著)

【参考】弊社メインとなるデータ課題解決のためのデータマネジメント

システム機能（ツール）だけでなく、人的要素（マインド、体制・役割、ルール・手順）も考慮し、「データ統合計画」を策定することが重要です。

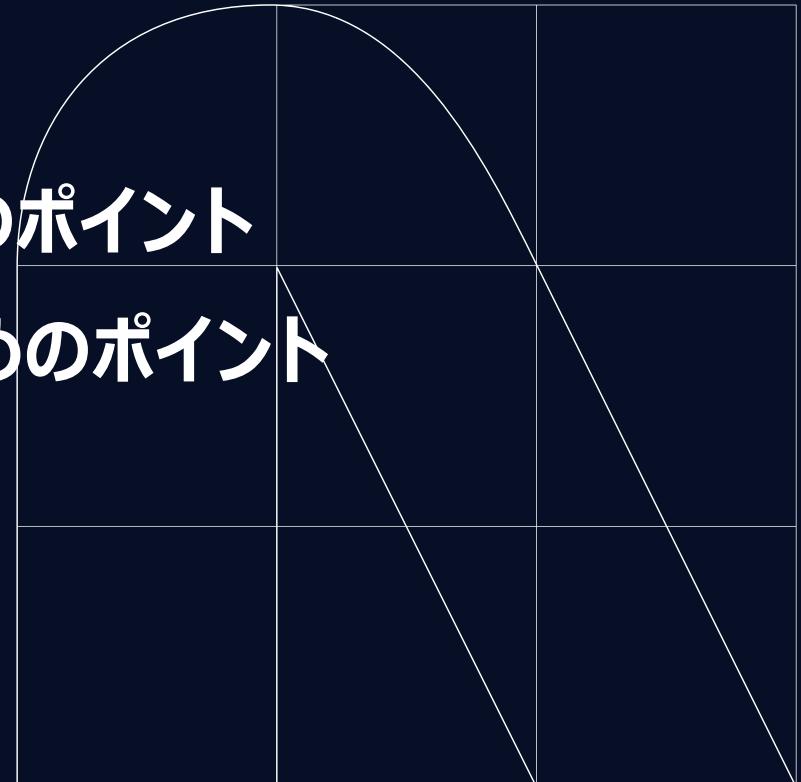


05

アンケート特典

データマネジメント活動を「企画倒れさせない」ためのポイント

データマネジメント活動を「永続的な活動」とするためのポイント



データ品質を支えるデータマネジメント活動

ビジネスに合わせてデータ品質を高めるためには、
データの改善だけでなく、**永続的にデータを維持・管理**する
「データマネジメント活動」が重要



データマネジメント活動の**検討領域**は、意外と幅広い!!
DAMAホイールにみる知識領域の**すべての実施はやりきれない…**
(と思う)

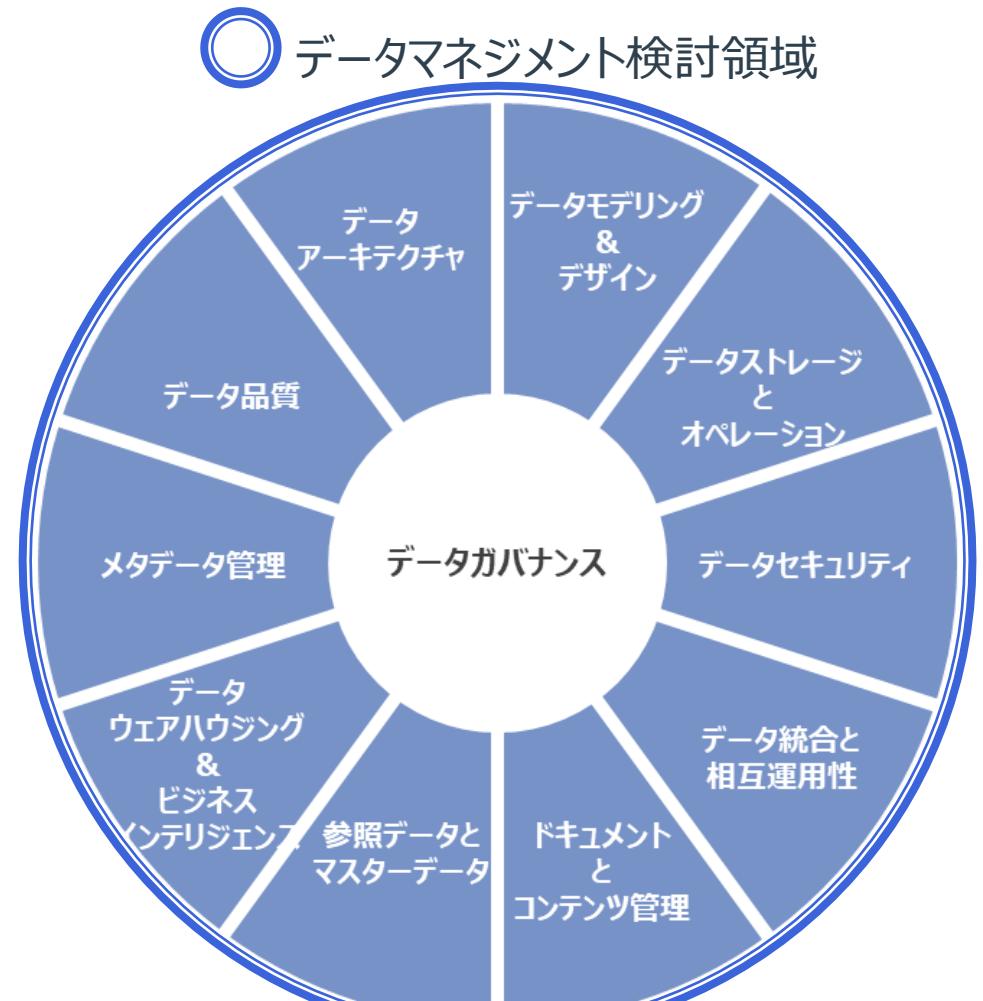


Point

データマネジメント活動の**成功**の方程式は？**何をどこからやれば？**
データマネジメントの活動の**推進ポイント**は？



「企画倒れしない」「永続的な活動とする」ための
データマネジメント活動の推進ポイントをご紹介します!!



DAMAホイール
The DAMA-DMBOK2
Data Management Framework
(The DAMA. Wheel)

データマネジメント活動を「企画倒れさせない」ためのポイント

データマネジメント活動は組織に根付かせることで効果を発揮し、その先のデータ活用を力強く推進することが可能。組織的な活動するために、「企画倒れさせない」ためのポイントを紹介。

Point

Point 1：仲間作り（推進メンバー）作り

データマネジメントの価値や必要性を理解してもらい、**部門を超えて組織的な推進チームを作ること**で持続的な活動とする

▶ もっと詳しく ▶ ▶ データライフサイクルを考えると、データに関わる部門は多岐にわたります。また、データマネジメントは組織的な活動とすることで効果を発揮しますので、部門を超えた仲間作りが必要です。情シス部門だけでなく実際に使用する事業部門を巻き込み、最終目的となるデータ活用の推進をゴールにした施策検討も重要です。

Point

Point 2：企画提案タイミング

データマネジメントは、**データ基盤導入やシステム刷新と同時に進める**方が上層部の理解が得やすい（忘れてはならない！）

▶ もっと詳しく ▶ ▶ データマネジメントは、その先のデータ活用を推進するための取り組みであるので、データマネジメント単独で効果を求めるのは困難です。EOL/EOS（製品やサービスの販売や保守終了）のタイミングやデータ基盤構築とセットで始めて、ツールの効果の最大化を狙うと良いでしょう。

Point

Point 3：打ち手の確からしさ（根拠・検証）

現状のデータを調査し、その状態を正確に把握することが、その後の必要な手立てを計画するために重要である

▶ もっと詳しく ▶ ▶ データ分析の結果に信頼性を持たせるには、元となるデータの正確性・整合性を確認しデータ品質の改善が必要です。まずは、データアセスメントを行い、現状データの状態を正確に把握・評価した上で、必要なデータ整備やデータ統合の手立てを設計する必要があります。

Point

Point 4：持続的な活動のための整備

初期データの品質改善だけでなく、**その後の維持・管理を加味して、計画当初から体制・運用ルールを検討**することが必要

▶ もっと詳しく ▶ ▶ データマネジメント活動で初期データの整備を行ったものの、その後の運用を考えていないケースも見受けられます。データは一度整えても時間の経過とともに、品質の悪いデータが入ってきますので、定期的な品質測定を事前に組み込む必要があります。また、データの活用目的や範囲の変化にあわせて、データ品質基準の再設定も考慮した方が良いです。

※詳しい解説は、この講演後のアンケートにご回答いただいた方への特典として、ダウンロードされた講演資料にてご覧いただけます。

データマネジメント活動を「永続的な活動」とするためのポイント

データマネジメント活動を「永続的な活動」とするためのポイントを紹介。

Point

Point 1：活動ガイドラインの策定

組織横断でデータマネジメント活動に取り組むためには、**各社の風土・実態・実情にあわせたガイドライン（運用ルール）作成**が必要（作りたくないけど）

▶ 具体例 ▶ ▶

- ・総花的に作るのではなく、スマートなアクセスを得るために優先順位をつける
- ・実際に使われているテンプレートをベースに加工すると効率的かつ確実な適用が可能

Point

Point 3：データ活用教育

データマネジメント活動は、**事業部主体のデータ活用の企画立案**が重要!! そのために、**真のデータ活用を体感**できるデータ活用教育は、**データ活用の普及・啓発**に効果的

▶ 具体例 ▶ ▶

- ・データマネジメント教育だけでなく、データ活用人材を増やすためのレベル別研修の実施
- ・データ活用の成果や成功事例を共有し啓蒙活動とする

Point

Point 2：活動のための体制と役割の明確化

永続的なデータマネジメント活動には**役割と責任を明確にし、組織的な営み**とすることが重要

▶ 具体例 ▶ ▶

- ・ガイドラインに則った運用ができているか確認・評価を行うデータマネジメント推進チーム
- ・データ登録業務やデータライフサイクルを管理するデータオーナー

Point

Point 4：データ活用を見据えた環境整備

データ活用を見据えたツール導入とそれを安心して利用可能な環境（**メタデータ、データ品質の維持・管理**も含めて）の整備が必要!!ないと、データ管理部門が破綻する

▶ 具体例 ▶ ▶

- ・データ統合を行うデータ連携ツールやMDMツールなど、最適なツールの有効活用
- ・導入予定のツールの特徴を踏まえたデータマネジメント支援の検討

※詳しい解説は、この講演後のアンケートにご回答いただいた方への特典として、ダウンロードされた講演資料にてご覧いただけます。

こんなお悩みはございませんか？

データマネジメント活動を進めている、または過去に進めた中で、以下のようなお悩みはありませんか？

- DAMAホイール全ての導入検討を行ったが、実施後に上手く機能していない、または検討を諦めた。
- EOL (End of Life) やEOS (End of Service Life) のシステムのマイグレーションやリプレースを実施したが、業務フローの変更や多くの業務への影響が発生してしまった。
- 安心してデータ活用ができるとは言えない、またはデータ活用の状況が不明。
- 想定していた事業部の主体的なデータ活用の企画が立案されていない。
- 構築した組織横断的なデータ基盤、データ活用基盤、業務システムの利用・活用が進んでいるか、判断が難しい。
- データマネジメント活動で残った役割がデータ管理部門中心となっている。
- データマネジメント活動の導入検討はしているが、どこから、どのように企画立案すれば良いかに悩んでいる。



ご清聴ありがとうございました。

Point

本資料に関するお問い合わせや
データマネジメントに関するご相談は、下記までご連絡ください。

株式会社 NTTデータ バリュー・エンジニア
E-mail: sales@nttdata-value.co.jp



NTTデータ バリュー・エンジニア

